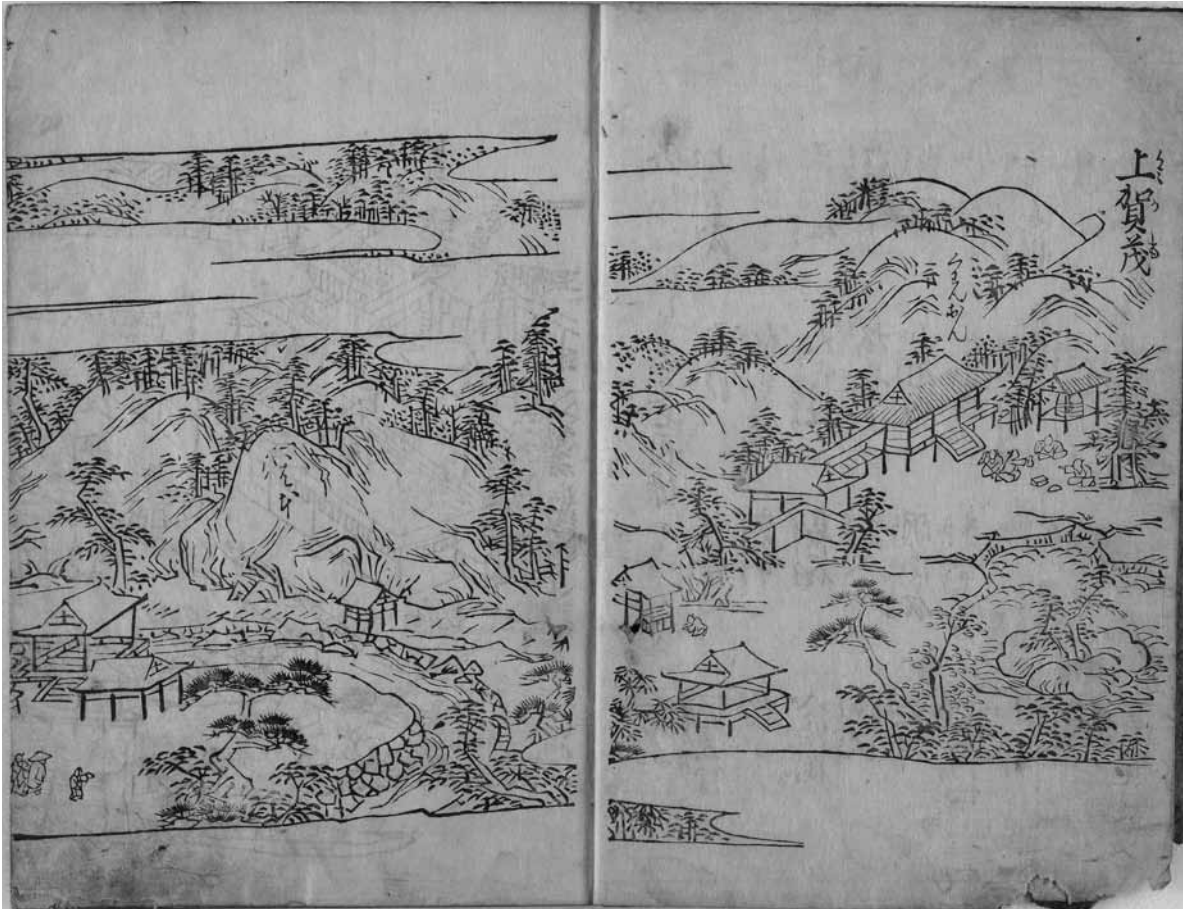


卷七「上賀茂」



京都府立総合資料館蔵



京都府立総合資料館蔵

上賀茂

○けし、洛陽より小や。里村おほく連屋たゞ
しきしなども。みな守社なれば也

○本社

烈雷神也。東向にたちたまへり
伊弉冉尊火神軻遇突智をうみ侍りける
を伊弉諾尊にきられ。三段となり。その一を
雷神とす

又伊弉冉尊脹満太。高上に八色の雷公あり。
其八雷は。首にあるを。大雷と云。むねに有を
火雷と云。腹に在を。土雷といひ。背にあるを(三才)

稚雷といひ。尻にあるを。黒雷と云。足の上に
在を野雷と云。陰の上にあるを。烈雷と
いふ

皇朝類苑曰日本国奉神道山列有賀茂明神
託三五歳童子降言禍福事

敏行朝臣哥に。千はや振かもの社の姫こ松
万代ふとも色はかはらじ。三条右大臣の
哥に。かくてのみやむべき物か千はや振賀茂
の社のよろつよをみん

賀茂重吉哥に。君を祈るねかひを空に
みて給へわけいかつちの神ならば神(三ウ)

卷七

【原文】

上賀茂

○此所は。洛陽より北也。里村おほく連屋たゞ
しきしなども。みな守社なれば也

○本社 烈雷神也。東向にたちたまへり
伊弉冉尊火神軻遇突智をうみ侍りける
を伊弉諾尊にきられ。三段となり。その一を
雷神とす

又伊弉冉尊脹満太。高上に八色の雷公あり。
其八雷は。首にあるを。大雷と云。むねに有を
火雷と云。腹に在を。土雷といひ。背にあるを(三才)

稚雷といひ。尻にあるを。黒雷と云。足の上に
在を野雷と云。陰の上にあるを。烈雷と
いふ

皇朝類苑曰日本国奉神道山列有賀茂明神
託三五歳童子降言禍福事

敏行朝臣哥に。千はや振かもの社の姫こ松
万代ふとも色はかはらじ。三条右大臣の
哥に。かくてのみやむべき物か千はや振賀茂
の社のよろつよをみん

賀茂重吉哥に。君を祈るねかひを空に
みて給へわけいかつちの神ならば神(三ウ)

【校訂本文】

上賀茂

○此所は、洛陽より北也。里村おほく連屋ただしきしなども、みな守社(注1)なれば也。

○本社 烈雷神(注2)也。東向にたちたまへり。

伊弉冉尊(注3)、火神軻遇突智をうみ侍りけるを、伊弉諾尊に
きられ、三段となり。その一を雷神とす(注4)。

又、伊弉冉尊、脹満太高、上に八色の雷公あり。其八雷は、首にある
を大雷と云ひ、むねに有るを火雷と云ふ。腹に在るを土雷といひ、
背にあるを稚雷といひ、尻にあるを黒雷と云ひ、足の上に在るを野
雷と云ひ、陰の上にあるを烈雷といふ(注5)。

皇朝類苑曰、日本国奉二神道。山州有賀茂明神。託二三五歳
童子一降、言禍福事(注6)。

敏行朝臣(注7)歌に、千はや振かもの社の姫(松)万代ふとも色はか
はらじ(注8)。三条右大臣(注9)の歌に、かくてのみやむべき物
か千はや振賀茂の社のよろづよをみん(注10)。

賀茂重吉(注11)歌に、君を祈るねがひを空にみて給へわけいかづち

の神ならば神(注12)。

【注】

- (1) 神社を守っている、また神社を守っている家、の意味か。
- (2) 上賀茂神社の祭神は賀茂別雷神であり、烈雷神を祭神とする説については未詳。
- (3) 天神七代の最後の神。男神の伊弉諾尊の妻となった女神で、国々や多くの神々を産んだ。
- (4) 伊弉冉尊が火神である軻遇突智を産んだ記述や、伊弉諾尊が軻遇突智を斬って、その一部が雷神となったという記述は、『日本書紀』神代上・第五段によっている。
- (5) これらの雷神の記述は、『日本書紀』神代上・第五段の一書第九によっている。ただし、八色の雷公といながら、「手に在るを山雷といひ」の山雷を誤脱したために、雷神の数が七つしかない。また、「さくいかづち」は「裂雷」と表記されるのが普通だが、「裂」ではなく「烈」と刻している。(注1)についても同じ。
- (6) 『皇朝類苑』は、南宋紹興十五年(一一四五)の江少虞が編集した類書。七十八巻、目録一巻、十五冊。宋代の史実や逸話など千余項を諸文献から集めて類別し、各項ごとに典故が注記されている。後水尾天皇の元和勅版で印行されている。この記述は巻四十三に見え、文章に小異がある。
- (7) 藤原敏行。？一九〇一または九〇七年。従四位上、右兵衛監。『古今和歌集』の時代を代表する歌人。
- (8) 『古今和歌集』東歌・一一〇〇番歌。十一月の中の酉の日に行なわれる賀茂の臨時祭が、宇多天皇の寛平元年(八八九)十一月二十一日に初めて執り行なわれた時、神前で東遊(あずまあそび)の歌として奏されたと伝承される。
- (9) 藤原定方(さだかた)。八七三―九三二年。紀貫之を擁する和歌サロンを中心的存在であった。
- (10) 『後撰和歌集』雑二・一一三一―一一三二番歌。賀茂の臨時祭の日に醍醐天

皇の前で詠んだもので、賀茂の臨時祭が始められた後、途絶えていた勅使の派遣が復興された折の和歌かと考えられている。

(11) 賀茂重保(かものしげやす)の誤り。重保は賀茂神主。一一一九—一九一一年。賀茂社を中心に活発な和歌活動を行ない、当時の歌人に依頼して寿永百首を賀茂社に奉納させ、また『月詣和歌集』を編纂した。

(12) 『千載和歌集』神祇歌・一二七三番歌。治承二年(一一七八)に重保の主催した『別雷社歌合』で詠まれた和歌。

【現代語訳】

上賀茂

○この場所は、都より北です。村落が多く、連なって並んでいる家々が上品なもの、それらが上賀茂神社をお守りしている家だからなのです。

○ご神体を安置する社殿 烈雷神が祭神です。東を向いて建てられています。いらっしやいます。

伊弉冉尊が、火の神である軻遇突智をお産みになったのだったが、そのために伊弉冉尊は亡くなった。軻遇突智は、怒った伊弉諾尊に斬られて、三つになった。そのうちの一つを雷神と言います。

また、伊弉冉尊が亡くなって、彼女の死体の腹は高くふくれあがっていて、死体の上には八種類の雷神がいました。その八つの雷神とは、首にいたるのは大雷(おおいかずち)と言い、胸にいたるのは火雷と言い、腹にいたるのは土雷と言い、背にいたるのは稚雷と言い、尻にいたるのは黒雷と言い、足の上にいるのは野雷と言い、女性器の上にいるのは烈雷と言います。

『皇朝類苑』には次のように述べられています。日本の国は神道を信じて、うやまい従っています。山城の国に、賀茂の明神がいます。空の上から三歳もしくは五歳くらいの児童におりて、不幸なことや幸福なことのお告げをします。

敏行朝臣の和歌に、次のようなものがあります。賀茂の社殿にある美

しく小さい松は、万年も続く天皇の治世を経過しても、その常緑の色はきつと変わることがないでしょう。また三条右大臣の和歌に、次のようなものがあります。今回の勅使の派遣だけで終わりにしてよいものではありません、今からは勅使の派遣をいつまでも続けて、賀茂神社の永遠であることを見届けたいものです。

賀茂重吉の和歌に、次のようなものがあります。わが天皇の永遠の栄えを祈る願いを、天空で満ちかなえて下さい、天空から下られた別雷の神でいらっしやるならば、ああ神よ(御願い申し上げます)。

(赤瀬信吾)